
Mirror Room

maki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M i r r o r R o o m

【Nコード】

N 3 0 2 9 M

【作者名】

m a k i

【あらすじ】

誰にでも惚れてしまう超絶美少女・遊美、幼なじみの昌、昌と不倫している専業主婦の美香、いろいろ混じり合ってます。

前編（前書き）

- こんな感じの小説を書いてみました。書いてて恥ずかしい・・・

前編

昌「…………おはよう」

遊美「あつ、マーサじゃん おはよー」

別れた女子と毎朝顔を合わすのは辛くないか？って言ってきた奴は山のようにいる。

……………辛いに決まってんじゃない！バカじゃねーの！
！？超大好きだったのにさあ、

「他に好きな人ができた」

ワケわかんないわ！あっちの方から付き合おうって言われて舞い上がってたあの時の自分を殴り倒したい。調子を乗りすぎるなって。

最初は中学だった。

誰とでも仲良くする遊美は自他共に認める惚れやすい女の子で、付き合った男子（男性含む）の数は20から先は覚えていない。数え始めて2ヶ月の事だった。

そんな折、浮気、不倫、寝盗り、つつもたせの噂まで、まことしやかに囁かれ始めた中2の秋、

遊美「マーサ大好きっ！いつそ結婚して！」

ヤローは公衆の面前で俺に熱い包容と接吻をブチかましてきた。今思い出しても体が火照ってくる。気持ち悪い。

俺がいつもの事だと思って何も言い返さなかったため、学校全体（先生達も含む）の公認カップルになってしまった。ワケが分からない。

でも心のどこかで喜んでいる自分がいた。1年の時から同じクラスだったが、俺の美遊に対する第一印象は

「ヤバイ、惚れそう」

だったというのは誰にも言っていない。

だって外見だけなら×××（国民的アイドル）や××××（映画やドラマに引っ張りだこ）よか美少女なんだから。

人の外見を表す形容詞をどう扱えば良いのか分からない。苦しい表現をするなら、『かわいい』を極めたような、それぐらいに見ただけならS級なのだ。

みんなに冷やかされたりするのも一興と思っていた終業式、前述のように突然フラれた。相手は1つ年上のヤンキーだった。しかも格好良くもない脂デブ、自分の容姿にそこまでの自信を持っていない俺でもさすがにアレよりブス呼ばわりされたらキレる。

3年が上がってすぐに二人は別れたらしい。いつもの様に気まぐれ娘の心操術だった。

知り合い共がイチイチしてくる報告に苛立った俺は美遊と関わるのをやめた。話しかけても無視したし、強引に近づいてきて何か言ってきた相手にもなかった。

とある日、美遊が学校に来なかった。

「学校ついていかにも出会いが溢れてるんだよ！？休んじゃうなんてもったいないよ！」

どんな目的で義務教育を享受してるんだと思ったが、そんなThe・風邪なんかひかないバカである美遊が学校を休んだなんて初めての

事だった。

その日の夜、メールが来た。

「来てください」

いつもだったら溢れんばかりの絵文字や顔文字でいっぱい液晶画面が広く感じられた。

しょっちゅう夜中に会いたがれた時に利用していた公園に走る。とにかくいつもとは違う遊美の様子が気にかかってしょうがないほどに心配だった。

遊美がそこにいるなんて確証はなかったけれど、こういう時はとりあえず急ぐものだとさすがにわかっていた。やっぱり男の子だし。

公園に行くとそこには見るも無惨に顔を腫らした遊美がいた。

「おいっ！？誰にやられたんだ！」

明らかに切羽詰まっていた俺の質問に対して、遊美は答えなかった。

「へへへっ、やっぱり優しいマーサはすぐ来てくれるよね」

王子様みたい、と安心しきったような笑顔を見せられて張り詰めていた神経に余裕が戻ってくる。それでも遊美の顔は痛々しそうに腫れ上がっているのだ。

「先輩の仲間にぶたれたの」

例によってあの脂デブだった。あの男は外見もさることながら性格の方もなかなかお粗末で、女ことにも平気で手を挙げるようなク

ソ野郎なのだ。しかも今回に至っては自分の手すら汚していないらしい。最悪と言っても良いくらいに腐ってやがる。

「家族はこのことしってんのか？」

「ううん、この顔見たら慌てちゃうかなって思ったから友達の家に行ってたってウソついた」

「ふうん……いや、だったらお前は昨日の夜から今にかけてまでどこで過ごしてたんだよ！」

「ここ」

「野宿じゃないか！」

とりあえず病院に連れて行った。それから遊美に家に帰るよう説得して、遊美の両親に細かい事情を説明して家に帰り着いた頃にはもう4時過ぎだった。

翌日は俺も学校を休んだ、あの身も心も最高に汚れきっている脂デブとケリを付けるためだ。

その翌日には遊美も学校に来ていた。大きいガーゼが痛々しいのだがこちらの真新しい痣や傷なんかと比べたら全然マシだった。

「あははっ、お揃いだね！」

・・・・・・・・クソっ　なんでそんなに可愛いのに平気で人に笑いかけられるんだ。

まだチャンスがあるんじゃないかって思ってしまうじゃないか。

この件をきっかけに周りから復縁しろ、復縁しろ、としつこく言われたが当の本人は2コ下のハーフの美少年に夢中になってたんだから俺なんかじゃあ話にならない。あっという間に時間は過ぎていつて卒業式になった。

俺は一度問題を起こしたせいで志望校には行けなくなったため、少しレベルを下げた自宅付近の高校に進学することにした。
遊美はあんな性格にも関わらず意外と頭が良いので進学校に進んだ。

割と俺の高校の近くだ。

「でも家も近いからしょっちゅう遊びに来てもいいよ!」

「ばかじゃねえの?」

俺は前回の脂デブの一見のせいで遊美の両親からやたらと警戒されていた。こっちは無実どころか関与すらしてないって言うのに・・・。

「なあ、遊美」

「おつ、珍しくマーサからの質問だね」

「そんなに珍しいのかよ・・・」

「そもそもマーサの方が私に喋りかけてくること自体珍しいと思うよ?」

「・・・それもそうだな」

「で、何が聞きたいの?」

マーサの質問にだったらスリ・サイズまでOKだよ、とか相変わらずバカなことを言っていた。こんなに男の煩惱刺激したりして、コイツの高校生活が今から心配だった。

「今さ、おれがおまえに好きだって言ったら、お前はどつする？」

この質問には答えてくれなかった。あんなに脳天気を形にしたような女が困ったように顔を曇らせるなんて、これっぽちも予想してなかった。

それから家が近いし学校も近い俺たちは登校中とか休日とか普通に会った。というより見かけるのだ、

ほぼ毎日。最初は気まずかったりしたが今では挨拶くらいする。それでも毎日会っているのに疎遠のような感覚だった。

さて、過去の話はおしまいだ。ここからは今の話。

中学の時からクラスメートは今だに俺の方が引きずっていると思っ
ていて、しょっちゅう女を作れと言ってくる。しつこいことこの
上ないし、そういう関係はもうこりこりだ。

そう思っていた1年の冬、ちょっとだけ奇跡を信じてみたくなる出来
事が起きた。

「君、かわいいね」

そんな風に声をかけてきた中西美香さん、28歳。細身で巨乳、お
まけに童顔、くるくると巻かれた髪の毛は年相応以上のかわいらし

さがあった。もう、総合的な面においては遊美以上のものが、
何を言っているんだ、俺は。

美香さんには家庭があった。旦那は7つ年上の営業マンでこどもは小学生が2人、どうやら専業主婦独特の暇つぶしの相手に俺は選出されてしまったらしい。

ばれた時のリスクを全部知っていたにも関わらず、年上の人の魅力には勝てなかった昌少年が不倫の道をまっしぐらになったのはその数週間後で、あつという間に関係を持ってしまった。

ただ、時々美香さんが遊美に見えてしまうのにはすごく参っていた。美香さんと遊美は似ているのだ、顔なんかじゃなく、雰囲気から何からが。

「昌君は好きな子とかいないの？」

「……………その質問はどう答えたって二つしか選択がないんですよ」

「あら、誰と誰なの？おばさんはすつごく気になるな」

「……………一人は美香さんですから大丈夫ですよ」

「ふふ、嬉しいなー、昌君大好きっ！」

……………ほら、またど

ことなく遊美に似たようなことを言うんだ。というかこんなにいい人を不倫に走らせる旦那は全人類に土下座で謝るべきだ。マジで。

そんなこんなで不倫デイズを満喫していた2年の夏、デートをすることになった。意外にも初デートなのである。

待ち合わせに20分も早く来てしまったのにも関わらず、待ち合わせ場所に到着したのとはほぼ同時刻に美香さんは来た。数秒違いである。

「まった？」

「お綺麗ですね」

ベタな駆け引きをするべきだったんだが、つい本音が口から出てしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・行こうか？」

「・・・・・・・・行きましょうか」

恥ずかしそうに手に触れてきた美香さんの手を少しでも強く握り返す。すごく柔らかかった。いかにも女性の手って感じ。

遊美の手もこんな感じだったな・・・・・・・・・・・・・・・・遊美・・・・・・・・イカン、イカン。身に余る幸福の最中にそんな黒歴史を思い出しては。

ちよつとだけ横を見てみると少しだけ恥ずかしそうに顔をうつむかせている美香さんの表情を見た。そういえば今の旦那とはお見合い結婚だつて言ってたな、こんなデートはしたことないとも言ってたし。それにしても可愛い。年上の女性が照れている様子ってこんなに可愛いものだったのか。

よく見たら顔もちよつと赤い。そんな事を思っていたら目があった。

「あ……………」

「……………」

「……………」

「……………ごめんね、10年も年上なのにリードして貰いっぱなしで……………」

「いいですよ、年齢なんて関係ありませんから」

「本当に！」

「ええ、本当ですとも」

「……………嬉しいっ！」

気をよくしたらしい美香さんは腕にしがみついてきた。ほとんど密着状態である、こんな状況を美香さんの近所に住んでいる奥様方に見られたらお互いの人生を棒に振ってしまうと思いながらも振り払うことは出来なかった。

そんなことを考えていたモンだから、前方の注意を怠っていた。クラスメートに会うかもしれないという警戒がこの時だけ完全に解かれてしまっていた。

「マーサ？」

俺のことをそう呼ぶ奴は、地球上で一人しかいない。

前編（後書き）

後編へ続きます

中編（前書き）

当初は2話構成にするつもりでしたが、3話にしてしまいました。

中編

声のした方向を見ると遊美がいた。運が悪い事に、その隣には見た覚えのある女子がいる。恐らくは友達と遊んでいたところだろう。

「美香さん、走れます？」

「？お友達なんでしょ？」

「お友達だからです！」

おそらくいきなりでは走れそうになかった美香さんをさっ、と持ち上げ（ほとんどお姫様だつこのような、というかそれ）、思いっきり遊美の隣を駆け抜けた。遊美の友達をかるく薙いで。

「ふわわわっ！！」

珍妙な声が聞こえたが気にしない、学校で妙な噂を立てられたらたぶん終わる。ウチのクラスの担任は「年上の女性と？うゝわゝ、やり手ゝ」とかきつと言うんだろが、それが不倫だと知ったら話は別だ。だって男に逃げられてフラれたばかりと聞くし。一応美香さん成人女性。同年代に見えなくもない童顔とはいえ、ちよつと無理があるかもしれない。

ん？なんで逃げるのかって？ヤツは今や他校の生徒だろって？おいおい、俺が通っているのは地元の高校だぜ？遊美と知り合いの女友達なんかもうウジャウジャだ。しかもいつ選抜したのか分からないくらいにバカ揃い。奇跡の並び、長眺め。尻軽どころか身軽以上。

とにかく、情報がバレる可能性をできるだけ削ぐためとはいえ、公道を伝説のような年上の究極美女をお姫様抱っこしながら走るのはやりすぎだなと、素直に思った。

でも止まるわけにはいかないんだ、なんというのか、バレるバレない以前に、テンションが上がってしまっているのだ。どうしようもなく止まらない。

「あつ、怖い！！ダメッ！！止まってってば！！」

ギユウッ、あつ、この感覚は………天国？

靴がギキイイン、となぜか金属音を立てる。とにかくにも、短

いながらもハードな逃避行は終わった。

「・・・・・・・・あ、あの・・・・・・・・」

「うう・・・・・・・・怖かった・・・・・・・・」

まだ美香さんは俺にしがみついている。肩口を掴まれて上半身を押しつけ合う形になっているから、うん、悪い気はしない。

「もう大丈夫ですよ」

そう言つて美香さんの頭を撫でる。うわぁ、すっごくさらさらしてる。できるのなら数年間はさわり続けていたい。

「・・・・・・・・ほんと？」

「・・・・・・・・はい」

平静を装つてはいたが、その時の心の中は台風よりもすごいことになっていた。

ううううう・・・・・・・・上目づかいだと・・・・・・・・？

この人はひよつとしたら己の魅力のほどを知っていて、それを存分に利用する魔性の女なのではないだろうか、それとも魔法使い？はたまた心理学者？

とりあえずテンパっているということをご理解ください。

「なんでいきなり走り出したりするのよう……」

「すみません、学校に僕たちの関係がバレたらたぶん僕は退学です」

「うーん、大丈夫よ、どうせ先生だってちよつとだけ昌君がおませさんなんだって思うだけよ？」

「……………」

その先生が一番の問題なんだけどな……………

「とりあえずデート再開しましょうか？」

「フフフ、そうね」

美香さんはそう笑いながら今度は自ら俺の手をしっかりと握った。

「ねえ、昌君。いきなり抱き抱えられてびっくりしちゃって言えなかったけど、けっこう力持ちなんだね」

「そんな、恥ずかしいですよ……………」

「ん？照れてるの？」

「照れてなんかいませんよ」

「嘘だよ、照れてるんでしょう？」

「照れてませんって！」

「なにムキになってんの？カワイー！」

美香さんはそうからかいながら首の辺りに抱きついてきた。

ちよつとだけためらつて、言つべき事を言つた。

「そりゃあ照れますって」

不意に言われた言葉に少し面食らつた美香さんは抱きつく力を少し緩める。その隙に

「・・・・・・・・!!」

「ん・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

周りに誰もいないのを計算に入れてのことだった。あとで計画的な

男は嫌いとかふくれっ面で言われるだろうが、きっと可愛いはずだから気にしない。

「・・・・・・・・・・ぷはぁっ！」

・・・・・・・・・・息してなかったらしい

「鼻呼吸できないんですか？」

「ううゝ、私は見合い結婚だから実は今のが・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・初めてなんですか!？」

そういえば、何度か×××とか××××とかしたけど、そっぴやキスしたことは・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・引いちゃうでしょ、三十路近いおばさんがここまで無経験だなんて・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・俺は美香さんそのものが好きですから」

「・・・・・・・・・・昌君はことごとく私の予想を覆すよね」

優しすぎるよ、そういうと美香さんは泣き出してしまった。

「美香さん………」

「なんで私はあの子達と同じ時期に生まれて来れなかったんだろう・
………」

「………」

あの子達というのはおそらく遊美のことだろう。

「昌君と同一年に生まれてたら……絶対昌君と出会って
みせて……今よりもっと仲良くなって……大好き
きだって言うのに………」

「美香さん……それ以上は」

「……ごめんね、卑怯だったね」

「……？」

「昌君に愚痴を言うためにデートしたわけじゃないのに……
昌君をはけ口みたいに使っちゃって……すごく卑怯だよ」
大人なのに、小さい啖きが耳に入るとどうしようもなくやるせない
気分になった。

「……別に構いませんよ」

「え……どうして昌君？」

「だから、別にいいですよ。家庭や旦那さんの愚痴を俺に言っても
大人ってきつと大変でしょうし」

「昌君………」

「すごく疲れてて誰かに甘えたいな、って思った時に俺に言っ
てくれればいいですから。その時は愚痴るなり甘えるなり、その時だ
け俺は美香さんの味方でもあり奴隷ですから」

「昌君っ!!」

本日二度目の抱きつきはなかなか速度と威力があつたが、大見得切つた代償とでも考えよう。

思い切つた事を言つてしまつたが、自信はない。大人の女性を慰めるなんてまだ社会人にすらなりきれていない俺では無理かもしれない。

でも、守つてあげたいっていう今の気持ちだけは、旦那にも負けねえ。

中編（後書き）

次で何とか最終回です。

後編 とうかおしまい？（前書き）

これでまとめきれなかったらアウトWWW

後編 とうかおしまい？

「何なんだろう この罪悪感のような……」

「大丈夫よ、本心を伝えれば」

結果から言おう、美香さんは旦那と別れることになった。

「ちよつと ええ!？」

「旦那に嘘ついて生きていくのにも疲れてたしね、良い機会だったもの」

それ以上は、語らなかった。

離婚ってきつと大変だろう、高校生の俺でもそう思える。

こどものことも心配だろうし、親にも細かく説明しなければならな
いだろう。家のこともだ、片方は出て行かなくてはいけない、ひよ
つとしたら両方出て行くっていう可能性もあるだろう、住む場所が
なくては人は生きていけない。

一介の高校生が背負えるはずのない責任を背負ってこれからは生き
ていかなければならないのだ。

「別に気負わなくても良いよ」

美香さんがこう言ってくれなかったらストレスでぶっ倒れていたか
もしれない。

「今回の一件は私の判断だもん。仲の良くなかった旦那から離れた
かった、見合い結婚の典型的な失敗例だってみんなに言うから心配

しないで」

「今回は大人の私が全ての責任を負います」

「……頼もしすぎますよ」

そう言つと美香さんは何も言わずに笑ってくれた。

そして、今日は卒業式の翌日、美香さんの二人のことも会う日である。美香さんがなんとか親権を勝ち取ったらしい。旦那は本当に無機質な人だそうで、こどもを任せるのは心配だったとか。

「いい？ ドア開けるわよ？」

「……………将来的にはお父さんと呼ばれる可能性があるんですよね」

「うん、うていうか呼ばせるわ。私に刺激的な毎日をプレゼントすると同時に安泰を奪っていった男ですもの」

……………笑顔が黒い。

「離したりなんかするもんですか……………」
ぎゅううう、という腕の感覚がちよつと苦しい。それが愛っていうものなら今の俺には重すぎるかもしれない。

まあ、俺も最愛の人を離すほどもつろくしたりはしていないから負けじと身をくつつける。

「・・・・・・・・暑苦しい」

「いいじゃないですか、大学出たら夫婦なんですからドアは開かれた。がんばれお父さん。」

前日、まさしく卒業式の日。校門の前で蟻の大群と格闘しているバカがいた。遊美である。

「…………お前まさか」

「すっぱかした」

「なにをしに高校へ進学したんだよ!？」

いや、卒業式に出ることが高校の全てではないと思うが。

「卒業式には出たよ、すっぱかしたのはお友達とやるお決まりの泣き会の方」

「ああ…………俺は相当ディープに泣き会参加者だったから、どれくらい待ってた？」

「2時間にはここにいた」

現在の時刻は5時を回っている。

「……………大人びてはきたのにな……………」

遊美はここ最近であのバカ丸出しなオーバーリアクションをほとんど取らなくなった。

大人になったなって言ったら

「人は傷ついて成長するものなのよ……………」

……………傷ついたのか。細かいことは聞けなかった。でも細かいところは変わっていないらしい。ここまで待ちぼうけ喰らうのがいい証拠だ。

「遊美は東京だっけ？」

「なんとかね、持つべきは親と窮地を助けてくれる友達とお金出ししてくれる彼氏ね」

「彼氏っていうかオジサマだろ……………いいかげん援交まがいなことはやめろよ」

「いいじゃない、マーサには関係ないんだから」

よく考えたらマーサって6年以上呼ばれ続けている。これで最後になるかもしれないと思うと少しだけ寂しい感じもした。

「マーサは例の奥様のために花婿修行でもするの？」

ちなみにあの日の翌日に遊美は学校に来て根掘り葉掘り聞かれた。そういえば急に大人び始めたのもその時からだ。

「とりあえず大学出てから仕事見つけたら結婚して貰うことにした。本当は学生結婚でも良かったらしいんだけどね……………そこら辺はしっかり働けるようになってないと、まあ……………パパになれないし」

「……………気持ち悪い」

「自覚があるだけマシだと思ってくれ」

「自覚があったらそれは最悪よ」

「それもそうか」

それから小一時間いろいろな話を話し合った。将来の話や夢、人生設計とか叶うかどうか分からない希望を口にしまくった。

「ねえ、マーサ。私にはすごくあなたに聞かなきゃいけない質問があるの」

「なんだよ？改まって」

「今でも私があなたのことを好きだって言ったら、マーサはどうする？」

そこにあるのは鏡だった。

あの日の俺がそこにいた。

姿や形は違っていても今日の前にあるのは鏡だった。

卑怯にも、相手を困らせるような質問を投げかける誘導尋問。
文句すら言えないくらいに。

「何ともねえよ、俺は一途なんだ」
「そっか、そうだね」

鈍感な主人公を演じるのは終わりにしておこう。社会人になってパ
パにならなきゃならないんだから。

「遊美よ」
「なに？」
「好きだったぜ」
「……私もだよ」

「美香さん」

「……すごく疲れたからってそこは顔を突っ込んでもいい場所ではないと思うんだけど」

「だって美香さんの胸の包容力はウチの両親の数倍はあるんですもの……」

こども達には少しの間出て貰っている。美香さんに「大人の時間」と言われた途端に二人とも出て行った。気の利きすぎる二人だった。

「っていうか二人とも中学生じゃないですか……」

「早く生まれた子だったしね二人とも」

「ウソつき」

「大人は嘘をつく生き物なの」

「なんですかそれ」

「座右の銘ってやつ」

「もうちょっとカッコイイやつじゃないんですか？」

「かっこいいじゃない、ニヒルっていうか」

「最高にかっこわるいですよ、その姿勢が」

「何ソレ？言つときますけど私の方が年上よ？」

「見た目は変わらないじゃないですか」

「変わるわよ・、白々成長するんだから」
「・・・・・・20過ぎたらそれは老いというのでは」
「とうっ!」

押し倒された。両手両足の自由は本当にきかない。

「きかん坊の新旦那さんにお灸を据える必要があるかな?」
「勘弁してくださいよ・・・・・・」

「・・・・・・私がおばさん担つても好きでいれる?」
「そんな当たり前のこと聞いてどうするんですか?」

素早く体制を入れ替える。ここからは想像に任せよう。

後編 といつかおしまい？（後書き）

無理矢理と感じたら厳しくお願いします。
できれば遊美サイドでも書きたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3029m/>

Mirror Room

2010年10月13日15時39分発行